

ザックバランに告白し輿論に答う

新しき男女の一对……

一 本年中は、と言ってもこの文章が雑誌に載る頃には昨年中になるのだが、人騒がせなことばかりでかして、世間様に対してまことに何とも申訳がない。お蔭様で、ずいぶんあちこちからお叱りを蒙ってさすがの僕も、ひたすらに恐縮している。

もっとも、もう少し正直に言うとお叱りの方の恐縮にはだいぶおまげがあるが、あの方の恐縮にはそれほどうそいつわりはない。

で、このあの方の恐縮については、僕自身のためにもまた彼女のためにも、是非とも詳しく申述べて本当にお詫びしなければならぬこともあるのだが、これまたはなはだ遺憾ながら、裁判中はお預りにして置く。

こう遺憾ながらばかりが続くと、書く本人にも読む人達にもはなはだつまらないことになるが、残るところはお叱りの方の恐縮である。いわゆる、恐縮である。仕方がないから、この恐

縮についてだけ、少々僕の言いたいことを言わして貰いたい。

いったい、人を叱るには、親切な仕方と不親切な仕方とがある。上手なものと下手なものとがある。そしてどうも悪いことをするような奴には、もっとも善いことをした奴を叱る奴もあるまいが、よほど親切にやらずに上手に叱ってやらないと、少しもききめがない。ききめがないばかりでなく、かえって、その悪事を増長させるようなことになる。

こんなことぐらいいは誰にだって分り切っている筈だが、さていよいよ叱るとなると、なかなかさううまくは行かないものと見える。

現に僕の叱られ方などは、大概は、実に減茶苦茶な叱られ方だ、つむじの曲っていない僕のことだからいいようなものの、もしこれが普通の悪い奴であつたら、「そんな馬鹿をぬかしやがるのなら、もっともっといくらでも悪いことをしてやらあ、」くらいのことはきつと言いやうな叱られ方だ。くどくはなるが、頭の悪い叱り手の人々のために、もう一度言葉を換えて言う。諸君の叱り方は、まるで「もっとやれ、もっとやれ」とけしかけているような、不埒千万な叱り方だ。

たとえば、などと今すぐにこのことの例を一々引いて行くと、話の順序が妙になるから、これは後でゆるゆる話すことにする。

どうもくどくなつて困るが、ここでも一つ、よくおことわりして置かなければならない。今

も言ったように、僕は決して、つむじの曲った悪人ではない。したがって、いくら善人でもから何と言って煽てられようと、決してそれに乗って悪事を重ねるようなことはない。けしかけているんだなどと言われて、急にあわて出す人達もあらうかと思って、御安心のために老婆心を出して置く。

二 お叱りと言っても、あちこちの新聞雑誌に現れたものの外は、僕の目に触れない。もっともその外にも多少は耳に触れたものもあるが、それは例によってお預りして置く。また、僕の目に触れた新聞雑誌と言っても、いくらかあるのではない。

今手元において拝見しているのは、いずれも十二号の、『ピアトリス婦人公論』『六合雑誌』『太陽』『新聞の新聞』および『日本評論』の六つに過ぎない。叱り手のお歴々は、山田わか、山田たづ、岡田幸、山田民、久保田富枝、野母、生田花世、安部磯雄、一条生、与謝野晶、杉村楚人冠、岩野清、平塚雷鳥、木村駒子、宮田修、木村秀雄、岩野泡鳴、武者小路実篤、赤木祐平、松本悟朗、磯村春、西川文の諸先生である。

中にも御丁寧なのは、『ピアトリス』と『新聞の新聞』『日本評論』の三つで、いずれも「大杉事件と自由恋愛論」というような標題の下に、上のごとき諸大家の名論卓説をあつめている。詳しく言えば、最初の七大家が『ピアトリス』最後の六大家が『日本評論』、そしてこの六大家の前の同じくまた六大家が『新聞の新聞』という順になる。雑誌を売るには、こんなこ

ともその苦心の一つになるのだから、せめてその苦心を買って、ここで広告をしてあげて置く。さらに、世の中でも一番商売上手なのは『新聞の新聞』で、それには諸大家の中に伊藤野枝の名を連ねてある。知らぬ間に何を書いたろうと思って開いて見ると、何のことはない、かつて「ピアトリスの同人とその将来」というような題で何か書いてくれと言われた時のおことわりの返事が、ちょうど「大杉事件云々」に対する返事のような体裁で、三、四行載っている。なかなか味なことをやる。

さていよいよこれから、この諸大家のお叱りぶりのいかに減茶苦茶であるかを見ることになるのだが、その前に、少々余談に似て余談でない余談をして見たい。

きのう、ふとした出来心から、他へ行く筈で出掛けたのをつい帝劇へ行ってしまった。そんな訳で、ちょっと遅れて、一番目の基盤忠信の二幕目、都室町小柴宅の場から観た。佐藤四郎兵衛忠信が、吉野山の雪中で、主源九郎義経のお身代りとなって討死すべきところをうまく斬り抜けて、ひそかに都は室町の情人小柴の娘小車の家に忍び込む。小車の父入道浄雲は、欲にくらんで、かくまうように見せかけて訴人に出る。忠信は、久しぶりのうまい酒に酔いつぶれて、大いびきで浄雲の帰って来るのを待っている。そこへ、六波羅から討手が、大勢どやどやとやって来る。

大立廻りが始まる。雑兵どもの十人や二十人は一となでに薙ぎ倒してもよからうと思われる

のだが、それではあんまり呆気がなくて芝居にならぬものと見えて、小面倒臭いのもかまわずに、まず一人二人三人と親切に小あしらいにあしらってやる。

またここにおことわりして置くが、僕は今、自分を基盤忠信にそして諸大家を討手の雑兵どもに見立てるような、そんな不都合な考えを決して持っているのではない。ただ、一人二人三人と親切に、ということだけをこの場面からの暗示に得たのだ。

三 そこでいよいよ立廻りにはいる。

まず逗子の病院で、新聞屋の諸先生が、相談でもして来たように口を揃えて言う。「このたびの事件で思想上に何等かの変化はございますまいか」と。うるさいから何にも変化はないと答える。

東京へ帰って来ると、また新聞屋の諸先生がやって来て、同じ質問をする。少々癪にさわったから、「え、思想上には別に変化ありませんが、ただその思想を実現する上の実行方法に、あるいは変化が来るかも知れません。どうせ死にぞこないの身体になったのですからこれから何をやるにも本当に死身になってやれるかも知れません」とでも嚇かしてやろうと思ったが、思い返して正直に、「いや何の変化もありません。ふだんまったく無自覚に無考えに生活している人なら、ちょっとした出来事につかってもすぐさま何とか考え込むのだろうが、憚りながら僕はそれほどの馬鹿者じゃありません」と答える。

たとえ話というものはなかなかうまく行かないものだが、かりに今、お隣りから火事が出たとする。やあ、世の中にはとんでもないことがあるものだ。隣りから火事が出るなんて、こりゃよっぽど考えなくちゃならんぞ。などと真面目に言う人があったらどんなものだろう。

ところが、この「こりゃよっぽど考えなくちゃならんぞ」を、だいぶあちこちから強制される。中にも、平塚明先生のごときは御親切にもハガキで「こんどのことはあなたがたに反省のいい機会を与えたでしょう」という意味のお言葉を伊藤野枝のもとに給わった。

こんどは『ピアトリス』の諸先生が束になって向って来る。まずお馴染がいに、筆頭の山田わか先生からあしらってかかる。

先生は、「恋愛に対する根本義が誤っていたことを悲しむ」と言って、そのいわゆる根本義をつぎのごとく説明している。「一つの植木鉢にいくつかの種を下せば、その種は芽を出し根をはって来ます。そしてそのいくつかの根はそだてばそだつほどお互いが土の奪い合いを始めます。もしその闘争がないようなら、それは愛ではありません。人間の肉体を物品視して、弄んでいるのです。」ダーウィンの生存競争説も、こんな場合にこんなふうにならんとすると、実に重宝きわるものだ。しかし一歩も二歩もゆずって、よし役立つとしたところで、いろいろな変り種を一つ鉢に植えて立派に花の咲く場合のあることぐらいは、この夏朝顔をいじくっていた先生が知らぬ筈はあるまい。

しかるに先生は、再び進化論をひっさげて来て、この場合を何千年の実験、そして失敗の結果、人間は不完全ながらも性的道徳もここまで進めて来たのに、「あの人達は船を逆に押そうとするのですもの」と言う。しかし先生は、御自分のこの進化論を進めて、今日その性的道徳がさらにどんなふうに進化しつつあるかを見ることを知らない。

「あれを皆さんが自由恋愛だなどとお思いになったら大間違い。あんな不自由恋愛はまたとありません。あの一団の間には、傷害、怨恨、憤怒、焦慮とあらゆる人間界の悪い分子が充満しているではありませんか。」おのろけじゃないが、そんな分子ばかりが充満していたとお思いいなったら、それこそ大間違い。これは先生の御亭主が親しみに溢れた大きな声でいつもおわかおわかと怒鳴っていらっしゃるところばかりを見て、先生の御夫婦の間にはいささかの傷害、怨恨、憤怒、焦慮、その他あらゆる人間界の悪い分子がないと思うのと同様に大間違いである。

「どこまでも自由の意志で、自己の観望するところを土台として対者を選択せよ、というのが自由恋愛なのです」と大へんに意気込んでいるかと思うと、すぐにそれが「けれども人の夫であろうが、人の恋人であろうが、好きだから食附いて行くというのは、獸性恋愛です」となる。まるで手品だ。

そしてその手品の種はこうだ。「自由というものは、私達が一つの社会を形成してその中に

生活している以上、その社会の認めた範囲内においての外は持つことはできません。」この社会の認めた範囲内においてというところに、よくお目をとめて御覧うじろ。

そしてまた、この範囲以外のことがしたかったら、「第一にそうする権利を得なければなりません。権利を得るとは言い換えれば社会に認めさせることです。認めさせるにはそうしなければならぬ正当なる理由を社会に提供しなければなりません。」

とうとう先生は僕の中へ落っこちてしまった。いったいその提供というのは、理屈でかそれとも事実でか、そんなにむきになって人を煽てるものじゃない。

おつぎは山田たづ先生。

「いったい愛というものの心理はエゴイスチックなものであって、ある人の愛を一人で占めていたものである。親子、兄弟、友人間の愛情においてもみな多少そういう傾向を持っている。が、親子、兄弟、友人間の愛では、その当事者同士に双方にいろんな複雑な交渉があって自分の愛する甲なるものの愛をまた自分の愛する乙なるものにも分け与えたいというような欲望も起ってくる。でそれがだんだんと複雑な関係になり、それが進化して来て、ついに性愛関係以外の他の愛には占有欲が起らなくなったものである。」いかにも面白い観方だ。まずそういうことにきめて置こう。

「しかし性愛は左様でない。それは全然自分一人においてのみ相手の愛を占めていたい要求

を持つものである。……で性愛というものは、ある一人と一人との間で行わるべきものであって、当然一夫一婦たるべきものである。」せっかくの面白い観方が、性愛の方には少しも適用されていない。そして、何故それが適用できないかということについては、理由らしい何等の理由も述べてない。

先生の愛の進化論は、そのままこちらへ戴いて来て、すぐさま先生の胸に当てることのできそうな、はなはだ危険な武器である。この意味において先生は、先生の極力反対する自由恋愛論の、はなはだずるい間接的煽て屋である。

『ピアトリス』連のあとの三先生に対しては、もう小面倒臭くなったから一と思いにまで切りにしてしまったものと仮定する。

四 おつぎは『太陽』の与謝野晶先生。

「大杉氏は現代日本の見識家をもって自ら任ずることのはなはだ厚い人である。私達婦人の知識の程度にくらべて、幾層倍の高い教養を備えた男子側の一人の代表者であることは言うまでもない。」その通り。

私達男子の知識の程度にくらべて幾層倍の低い教養を備えた女子側の一人の代表者である先生は、知識の不足と理性の欠乏という女特有の不具に憤激するのあまり、しかし自らもまたその不具に囚われつつ万事を手取り早くこの不足とか欠乏とかいうことによって解釈しようとする。

男には、何もかにもとまでは勿論行くまいが、とにかく大よその困難は予想し覚悟しつつ、なおかつその所信に従って盲進して行くというような場合のあることは先生には分らない。

この先生には、このくらいの大上段の構えで、脅しつけておけばたくさんだ。利口な女のよくやる、いい加減な「失礼な忖度」などで議論を進めることはよして、もっと勉強なさるがいい。

本当の事情や成行きをちっとも知らずに、ただうわべのしかも新聞紙上やうわさ話の上の事実だけによって、いい加減な「失礼な忖度」ばかりやる奴が、女の先生にも男の先生にもずいぶん多い。ひどい奴になると、いろいろな事実の捏造をやる。

岩野泡鳴先生は、「偉大なる馬鹿」であるとともに、また大出鱈目屋である。

先生は、かつて僕等がやっていた『近代思想』で、「君等も根本から出直して、もっと真面目に人生を考えたらどうか」というありがたい忠告をしてくれたことがあった。この忠告のあったことだけは事実だ。

しかるに先生は、「この忠告を私かに採用してかしないでか知らないが、近頃では、僕等の間で社会主義者と知れるものなどは大抵同主義の運動から離れて来た様子だ」と出鱈目。先生等の間で社会主義者と知られているものその誰彼であるかは知らない。しかし先生のあの

忠告のあった後に、社会主義の運動から離れて行ったものは、少なくとも僕等の知る範囲にはない。先生等の間で社会主義者というのは、まさに、生田長江先生や相馬御風先生などを指すのじゃあるまいね。

「大杉氏もかつて僕の家を訪問した時、この頃ではカレ自身の考え方もカレ自身からだいぶぐらつて来たというようなことを僕に告げた。」出鱈目もここまで来ると捏造になる。

「カレの真意では、一般のなまぬるい社会主義を捨てるのか、幸いに退いてまったく非社会主義になるか、もししからずんば一層激烈な方面に進めば、無政府主義と同様の極度なサンジカリズムに行くかの、いわゆる堺目の瓢箪であったのだ。」真意もへちまもあるものか、僕はすでにとうの昔から、無政府主義者としてまたサンジカリストとして名のつて出ているのだ。出鱈目野郎！

「野枝氏は彼女を大杉氏にすぐにも断念さしめるために、戸籍上の所夫を精神上だけで棄てて、大杉氏に走った。そして大杉氏がその友人に語ったというところを聞くと、やっぱり妻としては従来のがよく話し相手としては無学な野枝子よりは神近氏の方がよいそうだ。いかにもそれはもっともらしい。」何がもっともらしいのだ。この出鱈目の大馬鹿野郎！

おつぎは武者小路実篤先生。

先生はかつて、いつの頃であったか記憶していないが、とにかく『白樺』の六号雑感か何か

の中で、ヨーロッパのどことやらのかという絵の先生が二人の女と一緒に同棲していることを、実にえらいものだと感じていたことのある人である。

「大杉氏が自分の主義がこうであるから、お前が犠牲になれと言うのは、常に平等を云々として人々としてはおかしい言葉である。それは平等でなく本当の征服である。」すると、何とかいう絵の先生は、この本当の征服をやったからえらいということになるのだろうか。

それから、「このお前が犠牲になれ」というのも、僕が実際に言った言葉または実際にやった行為ではなく、ただ実篤先生の頭の中でこねあげたいいわゆる自然性論の理屈の上での結論である。

そしてまた、「三人の女を等分に愛すると理屈の上で言ったところで、それは事実の上で考えられない。愛は本能である。機械的には等分などどうしてでき得べきものでない」といき巻いているが、どこから聞いて来たか知らないけれど、等分などということは本人自身は言ったことも考えたこともない。

ところが、この等分の愛ということを、よくあちこちの先生が言う。彼女自身もしばしばそれを口にした。実に奇想天外のことである。

おつぎは赤木桁平先生。

「社会主義者であると言えば、社会が何等の批判もなく、盲目的に一種の反感を抱いてこれ

を嘲罵し、これを嫌悪する傾向がある。」先生にもだいぶこの傾向がある。

「したがって自分のこれらの人々に望むことは、これらの人々が本当に自己の使命を自覚して、自分の思想なり主張なりの正しいことを社会に是認せしめるため、自分自身を尊重し、まず自分の人格によって社会を征服することにより、自分の思想的權威を保証するように心懸けなければならぬということである。」はなはだおせっかいなことである。

「しかるに大杉氏の態度はこれとまったく反対である。……實際氏は一介の女のために、自分の大使命を忘却し、抛棄してゐるではないか。真に自覚せる、真に自己に忠実なる人は、いつも自分の運命を大切にする。要心する。そして些細なことで、自分の運命を顛倒するような馬鹿なことを、断じてしない。」ごもっともな言い分である。

しかるに先生は、この六月頃に、雑誌『新潮』で、これとまったくあべこべのお叱りを僕に向けてゐる。文句は覚えていない。しかし大体の意味はこうだ。

「大杉の恋は真面目でない、真剣でない。そこへ行くと、彼の先輩のラッサールはさすがにえらい。命がけの恋をしている。そしてついにその恋のために決闘して死んでしまった。」筆は調法なものである。

『日本評論』組の他の三先生も、例によって、一と思ひになで切りにしてしまったものと仮定する。

五 おつぎは『六合雑誌』の一条生先生。

「さて、この痴情事件は帰するところ主人公たる大杉の奉じてゐる思想の誤謬に胚胎したのである。彼は爾来社会主義を唱えて来たが、その社会主義は科学的に健全なる社会主義ではなく、極端なる危険性を帯べる無政府主義的サンジカリズムであつた。それがために数回入獄した前科者である。」

先生はいずれヤソ教育者かあるいはそれに近いものであらうと思われるから、ここに主イエス・キリストの話をして聞かせる。

キリストのヤソ教は、科学的に健全なるヤソ教ではなく、極端に危険性を帯びる無政府主義的ヤソ教であつた。それがためにはりつけにされて殺された大罪人である。

おつぎが例の商売上手な『新聞の新聞』組。

坪内士行先生は、さすがに坪内大先生のお仕込みだけあって、すいもからいもよくわきまえてゐる。

先生の賛成する自由恋愛説は、「男女双方ともに、自活の上においても、情の上においても、同等の強さのあるものが、互いの性格を知り合い、解し合つて相愛する上は、社会のいかなる伝習的の束縛や、法律上の制裁があろうとも、自由の行動を取るべしというのである。」

「しかし人情は不変のものではない。いったん相愛して、終生かわらぬものもあるが、ま

た、年とともに相愛のものもある。そうした場合に、いったん夫婦になったからと言って、やむを得ず、共白髪まで睨み合つて、添い遂げるなどは、馬鹿な話、かえって罪惡を犯すものである。社会のためにも、子孫のためにも。」

もっとも先生は、この自由恋愛がもっとも進んだ世においてこそ行わるべきもので、日本社会の問題となった自由恋愛の件は欠陥のみな現社会にこれを行わんとした失敗の事件のみであると断っている。そして誤解のないようにと、いろいろ弁解している。御無用なことである。

最後に先生は言う。「神代このかた、厄介な恋の道、そう自由に行かぬところが、オツなり、と言うより仕方はない。」

あゝ疲れた。もう小ゼリ合はいやになった。『新聞の新聞』組の外の先生等の姿もいつの間にか見えなくなつてしまつた。こちら辺で堀川御所へ駈けつけることとしよう。現れ出でたる江間の小四郎義時、実は安部磯雄先生、はたして忠信につめ腹を切らせるかどうか。

「大杉対神近の殺傷事件は近頃の不祥事である。神近市子にしろまた伊藤野枝子にしろ、今日のわが国婦人界にあつては教育もあり知識もあつて、日本婦人界の覚醒のために大いに働いて貰わねばならぬ人々である。これらの人々によってこの不祥事を惹起したというのは、これらの人々のためばかりでなく、わが婦人界のためにもっとも悲しむべき現象であると言わねばならぬ。私はここでこれを単なる殺傷事件とせず、少しく彼等の思想方面にはいつて研究して

見たいと思う。」いかにも御いでたちは立派である。

「それに自由恋愛ということである。自由恋愛ということについては、いろいろに人の意見が違つている。私もある意味において自由恋愛を平常から主張しているものである。しかし私の主張する自由恋愛なるものはわれわれが配偶者を選ぶ場合の選択の自由ということで、それ以外の自由を意味するものではない。すなわちいったん自由に選択して結婚した以上は、双方ともにこれに制限をせらるべきものである。もし制限を超える時は自由は放縦に流れるからいけないのである。」

なんだつまらない。何がすなわちだい。そんな言い分で、この忠信の腹を切らせれると思うのかい。武士の情も物の理もさっぱり知らぬ奴等ばかりじゃな。

さてこうなつて来ると、せっかく帝劇見物の話までして、末代までの物語の種に勇士の最後の有様を見せようと思つたのが、すっかり当てがはずれてしまつた。